

# 新しい“オセアニズム”と旧ドイツ領南洋

— 旧ドイツ領ニューギニアに関する現代ドイツ文学を読む —

副 島 美由紀

## 1. 新しい知としての“オセアニズム”

かつて「ドイツの記憶地図の中の空白地帯」と呼ばれたドイツによる植民地支配の歴史は、1990年代以降新しい学問領域として認知され、現在では盛んに研究されるようになってきている。その背景には英語圏におけるポストコロニアル批評及びジェノサイド研究の影響や、<sup>2</sup> 東西ドイツの統一等の要因があるが、何よりも大きな契機となったのは、旧ドイツ領南西アフリカで起きた「ヘレロ・ナマの蜂起」が2004年に100年記念の年を迎えたことであろう。その賠償問題がドイツで注目されたことにより、一般社会においても植民地の歴史が認識されるに至った。<sup>3</sup> こうして覚醒された“ドイツ領アフリカ”の記憶から様々な自伝的文学が誕生し、歴史学の研究書も数多く出版され、しばしば「アフリカ・ブーム」<sup>4</sup>という呼称で呼ばれる状況が生じることになった。

<sup>1</sup> Gesine Krüger: Vergessene Kriege: Warum gingen die deutschen Kolonialkriege nicht in das historische Gedächtnis der Deutschen ein? In: Nikolaus Buschmann/Dieter Langewiesche (Hg.): Der Krieg in den Gründungsmythen europäischer Nationen und der USA. Frankfurt a.M. 2003, S.120f.

<sup>2</sup> 参照：副島美由紀「ドイツの植民地ジェノサイドとホロコーストの比較論争:ナミビアにおける「ヘレロ・ナマの蜂起」を巡って」 In:「小樽商科大学人文研究」119輯2010, 89ff. 頁.

<sup>3</sup> Dirk Götsche: Deutsche Kolonialgeschichte als Faszinosum und Problem. In:Gabriele Dürbeck / Axel Dunker (Hg.): Postkoloniale Germanistik. Bielefeld 2014, S.355.

<sup>4</sup> Jürgen Zimmerer: [Rez.] Afrika-Lexikon. In: Literaturen. Heft 6 2002, S.92.

アフリカにおける植民地史に続いて、かつて「ドイツ領南洋 (Deutsche Südsee)」と呼ばれた太平洋地域の旧ドイツ植民地も次第に注目されるようになってきている。特に今世紀に入ってから、「アフリカ・ブーム」の場合と同様に多数の南洋関係の研究書や文学作品が生まれ、100年前に出版された関係書物の再版も行われている。<sup>5</sup> 公共テレビ局が関連する複数のドキュメンタリー番組を放送したり、<sup>6</sup> 南洋を題材とした美術展も開かれ、<sup>7</sup> 出版関係者の間では「帝国は売れ行きが良い」<sup>8</sup>という声が聞かれている。このような状況を反映し、研究者の間では「ドイツの植民地支配は現在のドイツにおいて、ナチス、ホロコースト、東ドイツとドイツ統一といった主要なテーマと並んで、ドイツの記憶文化の一部となった」<sup>9</sup>という主張がなされるほどである。

このように植民地時代の回顧が容易になった要因の一つとして、人文社会学の領域における「カルチュラル・ターン」以降、「文化としての植民地主義」<sup>10</sup>という捉え方が生まれ、植民地主義という現象が政治や歴史の場面に限った問題ではなく、ヨーロッパ文化の一つの顕現であったという考えが浸透しつつあることを挙げることもできるだろう。ドイツ文学におけるポスト

<sup>5</sup> Richard Parkinson: Im Bismarck-Archipel: Erlebnisse Und Beobachtungen Auf Der Insel Neu-Pommern (Neu-Britannien). Leipzig 1887. (Nachdruck 2013); Otto Finsch: Reisen in Kaiser Wilhelms-Land und Neu-Guinea an Bord des Dampfers Samoa: Samoafahrten in den Jahren 1884-85. Leipzig 1888. (Nachdruck 2015); Ernst von Hesse-Wartegg: Samoa, Bismarckarchipel und Neuguinea, drei deutsche kolonien in der Südsee. Leipzig 1902. (Nachdruck 2000) 等.

<sup>6</sup> 2005年11月放送の3回シリーズ„Deutsche Kolonien“及び2010年4月放送の3回シリーズ„Das Weltreich der Deutschen“.

<sup>7</sup> ヒルデスハイムのRoemer- und Pelizaeus-Museumにおいて2009年10月に開催された„Paradiese der Südsee: Mythos und Wirklichkeit“ およびハンブルクの民族学博物館において2012年から開催された, „Blick ins Paradies“, „Das Haus RAURU“, „Masken der Südsee“ などの一連の展覧会等である。

<sup>8</sup> Göttsche: Deutsche Kolonialgeschichte als Faszinosum und Problem. S.355.

<sup>9</sup> Ibid., S.356.

<sup>10</sup> Vgl. Alexander Honold / Oliver Simons: Einleitung: Kolonialismus als Kultur? In: Honold / Simons (Hg.): Kolonialismus als Kultur: Literatur, Medien, Wissenschaft in der deutschen Gründerzeit des Fremden. Tübingen 2002. S.7-15.

コロニアル研究も歴史学研究や社会学、文化研究等と近接するかたちで深化している。そして旧ドイツ領南洋のみならず、南洋地方一般に関するポストコロニアルな研究も、E・サイドがオリエンタリズムやアフリカニズムに関する研究を新しい知の一例<sup>11</sup>と称したことに倣い、“オセアニズム”という名称によって包括的に捉えられつつある。<sup>12</sup> ドイツ文学の分野におけるオセアニズム研究とは、南洋、特に旧ドイツ領南洋に関わる旅行記や文学作品の研究と南洋に関するディスコース研究であるが、ドイツでこのような研究に従事しているのは、G・デュルベック、Th・シュヴァルツ、A・ハルといった研究者達である。本論は彼らの研究成果を継承しつつそれを発展させるものとして、これまであまり論じられてこなかった旧ドイツ領ニューギニアに関する現代文学作品を取り上げ、そのポストコロニアル文学としての特徴を検討するものである。

## 2. 二つの異なるディスコース

ドイツ領南洋は、サモア諸島の西サモア地域から成るドイツ領サモアと、北マリアナ諸島からソロモン諸島の一部までを含むドイツ領ニューギニアとの二つの地域から成るが、この二つはそれぞれ独立した行政区を成していた。そして西洋の観点から形成されたいわゆる「南洋ディスコース」においても、この二つは異なる地域として考えられてきた。

1722年にカール・フリードリヒ・ベーレンス (Carl Friedrich Behrens) がオランダの探検隊と共にサモアを訪れ、その周航記の中でサモア人に関する極めて好意的な記述<sup>13</sup>を残して以来、サモアはドイツの精神史において、

---

<sup>11</sup> エドワード・W・サイド『文化と帝国主義1』大橋洋一訳 (みすず書房) 1998. 112頁。

<sup>12</sup> Gabriele Dürbeck: *Stereotype Paradiese: Ozeanismus in der deutschen Südseeliteratur 1815-1914*. Tübingen 2007, S.4-6.

<sup>13</sup> Carl Friedrich Behrens: *Der wohlversuchte Südländer - Reise um die Welt 1721/22*. Leipzig 1923 (Nachdruck).

フランス人にとってのタヒチのようにlocus amoenus（心地よき土地）として独特の地位を占めてきた。その形象の歴史はTh・シュヴァルツ<sup>14</sup>やG・デュルベック<sup>15</sup>によって詳細に論じられており、またエーリヒ・ショイアマンの有名な『パパラギ』<sup>16</sup>を初め、植民地時代から現代に至るまでの「サモア小説」についても現在では研究が行われている。<sup>17</sup>

サモア地域がこのように「高貴な未開人 (edle Wilde)」の住む「ドイツのタヒチ」として賞賛されたのに対し、ニューギニア地域はヨーロッパ人にとってカニヴァリズムの伝統が残る「野蛮な未開人 (unedle Wilde)」の土地であった。植民地行政区としてのドイツ領ニューギニアの中でもマーシャル諸島は、A・シャミッソーがその『世界周航記』<sup>18</sup>の中で“高德な自然の民”が住む地域として描いたため、ポリネシアの一部のように捉えられたりもするが、メラネシア人の住む地域についてはブーガンヴィルやG・フォルスター等の啓蒙主義の時代から、人々の“醜い”外見や、その“攻撃性”について記録され、<sup>19</sup>それが再生産されて一種のステレオタイプを生む結果と

<sup>14</sup> Thomas Schwarz: Ozeanische Affekte: Die literarische Modellierung Samoas im kolonialen Diskurs. Berlin 2013.

<sup>15</sup> Gabriele Dürbeck: Kannibalen, „edle Wilde“, schöne Insulanerinnen: Exotismus in der Südsee-Literatur des 19. Jahrhunderts. In: Johannes Paulmann (Hg.): Ritual-Macht-Natur: europäisch-ozeanische Beziehungswelten in der Neuzeit. Bremen 2005, S.95-112; Dies.: Stereotype Paradiese. (注12参照)

<sup>16</sup> Erich Scheurmann: Der Papalagi; Die Reden des Südseehäuptlings Tuiavii aus Tiavea. Buchenbach 1920.

<sup>17</sup> Anja Hall: Paradies auf Erden? Mythenbildung als Form von Fremdwahrnehmung. Würzburg 2008; Thomas Schwarz: Ozeanische Affekte.

<sup>18</sup> Adelbert von Chamisso: Reise um die Welt in den Jahren 1815-1818 (Tagebuch). Berlin 1836.

<sup>19</sup> 参照：ブーガンヴィル『世界周航記』（17・18世紀大旅行記叢書2）岩波書店、1990；ゲオルク・フォルスター『世界周航記〈上・下〉』（シリーズ世界周航記5・6）岩波書店、2006・2007。

ブーガンヴィルは、その「世界周航記」の中でメラネシア人について、「これらの島人たちはアフリカの黒人と同じくらい肌の色が黒い。（…）彼らは弓と投げ槍で武装している。（…）一般に黒人達は肌の色が白に近い人々よりも性悪であることを、我々は観察した。」（268-274）等と記している。またフォルスターにも「最も奇妙なのは顔立ちで、黒人のように鼻はペチャンコに広がっていて（…）さらに顔と胸に黒い墨を塗っている者が多く、そのため余計に醜

なった。またヘルダーが『人間史論』において、オセアニア人・メラネシア人をアフリカ人より下位の発展段階に位置づけたこともあり、<sup>20</sup> レオ・フロベニウス (Leo Frobenius) に代表される後の人類学者達も、カニヴァリズムを実践する民族を黒人より未発達な「人間史の放縦時代 (Flegeljahre der Menschheit)」に属すると見なしていた。<sup>21</sup> 従って19世紀後半になってドイツ領ニューギニア地域で実際に旅行あるいは生活体験を持った紀行文の著者達は、<sup>22</sup> 怠惰なのではなく「独立した自由人」<sup>23</sup>であるとしてニューギニア人を擁護したオットー・フィンシュ (Otto Finsch) のように、ステレオタイプ化された住民の悪しきイメージを修正する役割を果たすことになった。<sup>24</sup> そのような旅行家の例としては、「未開人だって知的な話ができるし、文明化された民族に見られるのと同じ性格や才能の諸段階が見られる」<sup>25</sup>と述べたカール・ゼンパー (Karl Semper) や、白人と原住民を比較すると「どちらの方が未開で暴力的なのかは時として判じ難い。ヨーロッパ人の残酷な仕打ちや無分別な行為がある」<sup>26</sup>と記したリヒャルト・パーキンソン (Richard Parkinson) 等を挙げることができる。

---

くなっていた」(下, 159f.) 等々の記述が見られる。

<sup>20</sup> Anne Löchte: Johann Gottfried Herder: Kulturtheorie und Humanitätsidee der Ideen, Humanitätsbriefe und Adrastea. Würzburg, 2005. S.112.

<sup>21</sup> Markus Joch: Völkerkunde in Neuguinea. In: Alexander Honold, Klaus R. Scherpe (Hg.): Mit Deutschland um die Welt: eine Kulturgeschichte des Fremden in der Kolonialzeit. Stuttgart 2004, S.130.

<sup>22</sup> カール・ゼンパー, フランス・ヘルンスハイム, リヒャルト・パーキンソンといった旅行家・植民者達である。Vgl: Karl Semper: Die Palau-Inseln im Stillen Ocean. Leipzig 1873; Frans Herrnsheim: Die Südsee-Erinnerungen. Leipzig 1883; Richard Parkinson: Die Erlebnisse und Beobachtungen auf der Insel Neu-Pommern. Leipzig 1887.

<sup>23</sup> Otto Finsch: Reisen in Kaiser Wilhelms-Land und Neu-Guinea an Bord des Dampfers Samoa. S.171. (注5参照)

<sup>24</sup> Dürbeck: Stereotype Paradiese. S.133.

<sup>25</sup> Karl Semper: Die Palau-Inseln im Stillen Ocean. Leipzig 1873, S.VIII, zitiert von Dürbeck: Stereotype Paradiese, S.141. (注12参照)

<sup>26</sup> Richard Parkinson: Im Bismarck-Archipel: Erlebnisse Und Beobachtungen Auf Der Insel Neu-Pommern (Neu-Britannien). Leipzig 1887, S.7, 25. (注5参照)

従ってニューギニア地域に関するポストコロニアル文学は、ドイツ領サモアに関するそれとは異なったディスコースの歴史を受け継いでいる。本論では、ドイツ領ニューギニアに関わるポストコロニアル文学の中でも、ゲアハルト・グリュマーの『反乱のポナペ』<sup>27</sup>、ズィビレ・クナウスの『宣教師』<sup>28</sup>、そしてユルゲン・ペチュルの『楽園最後の舞踏』<sup>29</sup>という三作品を取り上げ、植民地時代以前の「南洋ディスコース」との関連性や、それぞれの作品においてどのようにポストコロニアル的文学性が創出されているかという点について考察を加えたい。

### 3. 反植民主義の2つのトpos

原住民による反植民地闘争は、歴史研究にとってのみならずポストコロニアル文学にとっても重要なテーマの一つであるが、ドイツ領南洋の歴史における原住民の闘争としてまず想起されるのは、「ポナペの反乱」および「バイニングの虐殺」と呼ばれる二つの事件である。本論で取り上げる三作品はこれらの事件を背景に成立しているので、まずは事件の概説から始めたい。

ドイツ領南洋における最大の反植民闘争である「ポナペの反乱」は、ミクロネシア諸島のポナペ島<sup>30</sup>において1910年に起きた事件である。植民地政府により計画された道路建設工事に端を発したものであるが、まず先祖の霊が眠る場所とされる森林地帯の貫通工事自体に対する島民達の反感があった。さらに強制労働や鞭打ちの刑罰を科されることに対する反発もあり、工事の始まったソケースという地区の住民達が決起し、その結果4名のドイツ人官

<sup>27</sup> Gerhard Grümmer: Ponape im Aufstand. Berlin 1991.

<sup>28</sup> Sibylle Knauss: Die Missionarin. Hamburg 1997.

<sup>29</sup> Jürgen Petschull: Der letzte Tanz im Paradies. Hamburg 2009. (本稿では以下の版を使用：Petschull: Der letzte Tanz im Paradies. München 2011.)

<sup>30</sup> 日本ではボンペイ島とも呼ばれている。また反乱も「ソケースの反乱」と呼ばれているが、ドイツ語による呼称との整合性を考え、「ポナペ島」、「ポナペの反乱」と表記する。

吏が殺害されてしまう。しかしこの事件の特異性はむしろドイツ側の強硬な懲罰のあり方にあった。植民地政府は青島から5隻の軍艦を出して討伐隊を編成し、村落を焼き払うなどの焦土作戦を行い、首謀者達を捉えて17名を処刑する。さらに集団に対する罰として、ソケースの住民450人ほどを言葉も異なる遠方の島であるヤップ島に強制移住させてしまう。この事件に関する最近の歴史研究は、このような懲罰の正当性に関する批判的な省察となっている。<sup>31</sup>

東独出身のゲアハルト・グリユマーが発表した『反乱のポナペ』(1991)は、ソケースの反乱グループとドイツの討伐隊との抗争を描いた歴史小説で、かなり詳細な記録文学となっている。またクナウスの『宣教師』(1997)は、ポナペ島での布教活動のためにドイツから派遣された女性宣教師を主人公としており、島で男性宣教師と結婚して家庭を持った主人公が反乱の渦中に投じられる様子を描いている。グリユマーの作品は発表が1991年と非常に早く、西ドイツとは異なり早くから反帝国主義の観点によって行われていた東ドイツの植民地研究の成果を反映したものであろう。またクナウスの場合は本人の説明によると彼女自身の大叔母が主人公のモデルであり、<sup>32</sup> 作品は著者自身を含めた一家族の年代記のように構成されている。

「ポナペの反乱」に先立つ1904年に起きた「バイニングの虐殺」は、その凄惨さによって記憶に残る事件である。バイニングと呼ばれる民族が住むニューブリテン島の山岳地帯にある伝道村で、カトリックの伝道所を開いていた10人のドイツ人教会関係者がある朝一度に殺害されてしまう。そのうち5名は聖心会の修道女であった。事件の背景には、信徒となった村民達に教会が厳格な規律を課し、それがポリガミー的伝統を持つバイニングの生活習慣と乖離していたことや、規律を犯した者に対する鞭打ちの罰が村民達の尊

---

<sup>31</sup> Thomas Morlang: *Rebellion in der Südsee: Der Aufstand auf Ponape gegen die deutschen Kolonialherren 1910/11*. Berlin 2010.

<sup>32</sup> <<http://www.sibylle-knauss.de/die-missionarin.html>>[Abruf:14.08.2015]

敵を傷つけたこと等があると言われている。<sup>33</sup> そしてこの反乱においても集団的懲罰が行われ、一説によると100人にも及ぶバイニング人が殺害、あるいは処刑されることとなった。<sup>34</sup>

「バイニングの虐殺」は2010年4月に放映されたZDFによるドイツ領南洋に関するドキュメンタリー番組でも取り上げられ、番組の授業用補助教材も製作されている。<sup>35</sup> 従ってこの事件を取り上げた最初の文学作品であるユルゲン・ペチュルの『楽園最後の舞踏』が2011年に発表された際、このような歴史物語を受容する土壌が現代の読者の間にある程度形成されていたことが推測される。

#### 4. 「代補」か「領有」か

一つの文学作品に関して何をポストコロニアルと呼び得るかについての判断基準は常に一様ではないが、<sup>36</sup> インターカルチュラル及びポストコロニアル文学の代表的な理論家であるH・ユアリングスは、作品がポストコロニアル文学であることの指標として以下の4種の特徴を挙げている。<sup>37</sup> 第一にコロニアルな想像力を脱構築するもの、つまり「黒人」や「ユダヤ人」といった被差別的トポスを内破させるものである。第二にポストコロニアルな〈他者〉性を構築するもの。つまり植民地化された声を可視化するもので、ハンス・クリストフ・ブーフの『ポート・プランスの結婚』<sup>38</sup>やウーヴェ・ティ

<sup>33</sup> Alexander Krug: »Der Hauptzweck ist die Tötung von Kanaken« Die deutschen Strafexpeditionen in den Kolonien der Südsee 1872-1914. Frankfurt a.M. 2005, S.280f.

<sup>34</sup> Ibid., S.278.

<sup>35</sup> <<http://scienceblogs.de/zeittaucher/2010/04/10/unterrichtsmaterialien-zu-das-weltreich-der-deutschen-zdf/#comments>>[Abruf:14.08.2015]

<sup>36</sup> Vgl.: Gabriele Dürbeck: Postkoloniale Studien in der Germanistik. In: Dies./Axel Dunker (Hg.): Postkoloniale Germanistik. Bielefeld 2014, S.19-70.

<sup>37</sup> Herbert Uerlings: Postkolonialismus und Kanon. In: Ders./Iulia-Karin Patrut (Hg.): Postkolonialismus und Kanon. Bielefeld 2012, S.53ff.

<sup>38</sup> Hans Christoph Buch: Die Hochzeit von Port-au-Prince. Frankfurt a.M. 1986.

ムの『モレンガ』,<sup>39</sup> フーベルト・フィヒテの『シャンゴ』<sup>40</sup>といった作品がそのような特徴を持つ。次に、ポストコロニアルな記述を行うもの、例えば『モレンガ』における魔術的リアリズムによる語り等である。そして第四に世界文学的な広がりを持つもの、である。ハイナー・ミュラーの『指令』<sup>41</sup>やウルス・ヴィドマーの『コンゴにて』<sup>42</sup>等が挙げられる。

これらの文学的資質の中でも、「〈他者性〉を構築する」ことは、例えばインターカルチュラル文学においても重要な作業ではあるが、とりわけポストコロニアル文学にとっては重要かつ困難な技である。植民地化された声を可視化することには、G・C・スピヴァクがサバルタン論の中で指摘した通り、「第一世界の知識人がみずからは非在の非代表者を装いつつ被抑圧者に自分で語らせようとする「危険度」<sup>43</sup>が潜んでいるからである。一つの主体がある一つの〈他者〉を選択してその声を「代補」しながら実は「領有」を行うことに繋がりがかねない。スピヴァクによると、実際にはそれは「善意に満ちた西洋知識人（傍点原著者）のための企てである。」<sup>44</sup>ウーヴェ・ティムの、「感情移入の美学自体がコロニアルな行為」<sup>45</sup>であるという発言は有名な言明になってしまったが、そのようなポストコロニアルの視点に立つなら、例えばすべてをエキゾティシズムの中に包摂してしまうヴィクトル・セガレンのような作品は、ホミ・K・バーバも『文化の場所』において批判しているような「解釈の閉じられた円環」<sup>46</sup>を作り出すものとして忌避されねばならない。

<sup>39</sup> Uwe Timm: Morenga. Königstein im Taunus 1978.

<sup>40</sup> Hubert Fichte: Xango. Frankfurt a.M. 1984.

<sup>41</sup> Heiner Müller: Der Auftrag. Frankfurt a.M. 1988.

<sup>42</sup> Urs Widmer: Im Kongo. Zürich 1996.

<sup>43</sup> G.C.スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳（みすず書房）1999, 64頁.

<sup>44</sup> 同上 65頁.

<sup>45</sup> Christof Hamann/Uwe Timm: „Einfühlungsästhetik wäre ein kolonialer Akt“: Ein Gespräch. In: Sprache im technischen Zeitalter, Vol.168. 2003, S.452ff.

<sup>46</sup> ホミ・K・バーバ『文化の場所:ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也/正木恒夫/外岡尚美/阪本留美訳（法政大学出版局）2005, 55頁.

## 5. サバルタンは語る

しかし、これまで典型的なサバルタンとして全く声を与えられてこなかった〈他者〉を不可視化あるいは周辺化させないためには、いかに困難な作業であろうとも、注意深い言及なり引用なりによって彼らの声の「領有」なき「代補」を試み続ける他はない。ティムが『モレンガ』と『蛇の樹』<sup>47</sup>において〈他者〉に殆ど語らせることなくその主張を顕在化させたのは、そのような試みの成功した例である。<sup>48</sup> グリュマーは『反乱のポナベ』において全く異なった手法、つまり反乱分子である原住民達に多くを語らせることによって〈他者性〉の構築を試みている。物語は反乱を起こしたポナベ人達の処刑の場面から始まり、その後回想のかたちで反乱の経緯を時間を追いつつ明らかにしていく。全能の語り手による地の文と直接話法によって、ポナベ人の物語とドイツ人のそれとが交互に、そして平等に語られていくのだが、地の文にはポナベ島の地理や住民の信仰、封建制度等に関する記述が織り込まれ、それが〈他者〉の声の真正性を補強する役割を果たしている。また、反乱の首謀者であるヨマタウのみならず、反対派を含めて多数のポナベ人が語る機会を与えられているため、ポナベ側の声は稠密に伝えられているような印象を与える。彼らの話の内容は非常に具体的で、「誰もがそれを知っていた」(42)、「男達は正確に知っていた」(45)などの節の挿入によってもその真正性は印象付けられる。対してドイツ側の住民の知的及び感情的関心は希薄なものであることが暗示される。例えば工事監督官の一人が南洋にやって来たのは冒険を求めてであり、「蝶の収集」(22)でも構わなかったという記述や、ニューギニア庁の総督について、ヨーロッパによりもたらされる文明や文化といった人生の幸福な側面にしか目を向けず、「搾取や抑圧などは

<sup>47</sup> Timm: Der Schlangenbaum. Köln 1986.

<sup>48</sup> 参照：副島美由紀「ウーヴェ・ティムの「蛇の樹」におけるポストコロニアルおよびインターカルチュラル文学としての諸相」 In: 「小樽商科大学人文研究」126輯 2013, 225-252頁.

認識できなかった」(80) という下りによってである。ドイツ人の監督官は住民の言葉が理解できず、工事現場ではピジン英語以外の言葉が禁止されているが、ヨマトウはキリスト教団による教育の結果として英語とドイツ語を話し、ドイツ軍に対して降伏を呼びかける手紙もドイツ語で書き送っている。語りの筆致は“未熟な発展段階の南洋の住民”というイメージに逆らって進み、ドイツ側の支配者としての能力と正当性に対する信仰が浸食される効果をもたらす。

この小説において最も際だっているのは、反乱の経緯や住民の事情に関する詳細な記述である。著者のグリユマーは恐らくこの事件に関する旧植民地省の文献を読破したと思われる、この作品発表の約10年後に出版された、軍事史家Th・モーラングによる「ポナペの反乱」に関する研究書<sup>49</sup>との齟齬も感じられない。また、小説中にはドイツ軍による討伐作戦の報告が美談や武勇談に書き換えられる経緯も記されており、それが上記の「ポストコロニアルな記述」を形成している。結果として、この作品によって反乱側の主体にかなり公正な声が返還されたという印象を受ける。グリユマーのこのような手法は、単に「感情移入の美学」の成果ではなく、綿密な歴史研究によって生まれたものであろう。そしてその研究が歴史研究書ではなく、文学作品として結実したことにより、〈他者〉の声の具体性のある可視化が可能になったと言えるだろう。

## 6. ポリフォニーと対位法

一方、クナウスの『宣教師』は同一の歴史的事件を扱いながら、異なった手法によって極めて質の高いポストコロニアル文学を成立させている。この物語の主人公リーナはごく普通の柔らかなドイツ人女性であるが、やや受動的なその対人的姿勢によってかえって遙か異境に赴き、〈他者〉と交わり、結

---

<sup>49</sup> Morlang: Rebellion in der Südsee. (注31参照.)

果的に試練を柔軟に克服していくような人物として描かれている。良家の子女であった彼女はたまたま婚期を逃したことによってキリスト教団体に参加するが、ポナベで伝道活動を行う牧師の援助を任じられ、島に派遣される。妻に先立たれて双子の娘を抱えた牧師の求婚を受け入れた彼女は牧師と共に布教活動を行うが、やがてソケース族の反乱に巻き込まれてしまう。混乱の中で娘の一人と生き別れた彼女達は精神的な打撃を受けるものの、結局ドイツに帰還して平穏な暮らしを手に入れる。そしてポナベの記憶はもう一人の娘の意識に刻み込まれ、暗黙のうちに継承されて行くのである。

この作品の特徴として、まず語りの多重性がある。物語は多層的な枠構造になっており、最も外側の枠を成すのが主人公の姪孫の語りである。彼女はリーナから2世代後の時代を生きる人間として、自分の大叔母の体験を想像の中で再構成しようとする。次にその体験全体を語る無名の語り手がいるが、その視点の位置は実に多様である。物語の中心的舞台はドイツにおけるニーナの郷里とポナベであり、視点は常にこの二極を往来するが、他にもリーナが属する教団の本拠地やドイツからポナベに移動するまでの経由地等、多くの土地を通時的に結んで物語が構成されていく。このような視点の移動は、あたかもドイツとポナベの間に「弁証法的とも言えるような関係が存在するかのように」<sup>50</sup>に記述する手法だという解釈もあるが、視点の絶え間ない変化によって一元的、あるいは二元的な世界観が常に断片化され、ある見識の不完全さが意識される効果もたらされる、というのが筆者の考えである。

さらに時折語り手が交代し、リーナの周囲の人々が登場して直接語り手となったり、彼らの日記や書簡が挿入される。その上成長した大人となったリーナの継娘のエリーザベトによる語りという、最も内側の枠組みも存在する。このように複雑なポリフォニー的ナラティヴによって、植民地支配という現象の様々な位相に関する視点の数々が相対化を被ることになる。例えばポナベの以前の統治者だったスペイン人や植民地経営の財政的側面、宣教師を送

<sup>50</sup> Simplicio Agossavi: Fremdhermeneutik in der zeitgenössischen deutschen Literatur. St. Ingbert 2003, S.122.

る教団側の考え等についてである。

一方、主人公のリーナの行動に関する記述は具体的で、ドイツ人読者にとっても「真生性のある」<sup>51</sup>記述となっている。そして彼女は仕事柄ポナペの女性や子供達と接し、ドイツ人官吏や夫である牧師達のように確たる使命感や優越感を持たぬため、地元の伝統的医術を知り、住民の性格的美点を発見するなどして〈他者〉や異文化から多くを学び受容する存在となる。

また、長年ポナペに住むイギリス人男性のウィンストンも、ある種のポストコロニアルな〈他者〉性を帯びた存在である。かつてはイギリス海軍に属していたウィンストンは、軍服を捨ててポナペの女性と結婚し、現地の文化に順応して暮らしている。ドイツ人達からは所謂“波止場ごろ（Beachcomber）”として蔑まれてはいるが、本来知的な男性で、反植民地思想の持ち主である。彼はリーナの隠れた援助役でもあり、「どの島にもそれぞれの神々があり、彼らは自分の故郷においてのみ力を持つ」（66）といった文化相対主義的言動が、実はリーナの西洋中心主義的な考えを修正する役割を果たしている。

彼女は次第に自分が島によって不要な存在だと感じるようになるが、ソケースの反乱を経て自分達が役に立たないどころか対立の導因ともなり得ることを悟り、帰国することを選択する。しかし完全な洞察が得られる訳ではない。夫である牧師は、自分達が島にやってきたことは「恐らく間違っていた」、しかし「神の名においてやって来たのに」（345）何故だろうか、と自問するが、答は得られない。

そしてこの小説において極めて特異な印象を与えるのは、継娘のエリーザベトの独白である。彼女はドイツに帰ってからもしばらく1人称複数形で自分のことを話し、ポナペに残されてしまった妹イルムガルトのことを決して忘れることがない。ドイツでは誰とも分かち合えない知識を自分が秘匿していると感じ、イルムガルトとは連絡が取れないにもかかわらず - そもそも

---

<sup>51</sup> Ibid., S.109.

彼女がポナペに残っているのか、あるいはソケース族と共にヤップ島に追放されたのか、あるいは帰還を許されて今はポナペ島で暮らしているのか、知る術はない - 妹の身近な存在を感じながら暮らし、それは生涯変わることのない感覚だと確信している。「Du mein Leib, ich dein Schatten」(218) という、彼女の妹に対する呼びかけにより、エリーザベトの物語に対応するイルムガルトの物語の存在が読者の意識の中に喚起される。そしてサイドが提唱するような「対話法的」<sup>52</sup>な物語の読みの可能性が暗示される。

以上のように、『宣教師』は語りのポリフォニーと対位法的読みを通してコロニアルな想像力の脱構築とポストコロニアル的記述を行う点で、質の高いポストコロニアル文学として評価することができる。このような文学的成果を可能にしたのは、先述のように著者自身の身近に作品のモデルがいたという偶然性にも拠るであろうが、TAZの書評が「偉大だが過小評価されている」と認めるような、<sup>53</sup> 著者の文学的才能の顕れであるとも言えよう。

## 7. 商社, 学問, 教会とサバルタン

ドイツにおけるアフリカニズムの研究者であるD・ゲッチェは、90年代に多く生産されたアフリカ小説の中には植民地時代のコロニアル小説を模倣したような英雄・冒険物語が多いと述べているが、<sup>54</sup> ユルゲン・ペチュルの『楽園最後の舞踏』もコロニアル的冒険小説の要素を持つ作品である。雑誌「シュテルン」のリポーターとして成功したジャーナリストであったペチュルは、自分が取材した事実に基づくフィクションを得意としており、1985年に起きたトランスワールド航空847便テロ事件を題材とした『殉教者』<sup>55</sup>は日本語に

<sup>52</sup> エドワード・W・サイド『文化と帝国主義1』, 111f. 頁.

<sup>53</sup> Andrea Goldberg: Frau Missionar in der Südsee. In: TAZ. 20.01.1998.

<sup>54</sup> Dirk Göttsche: Hans Christoph Buch's *Sansibar Blues* and the Fascination of Cross-Cultural Experience in Contemporary German Historical Novels about Colonialism. In: German Life and Letters 65.1. 2012, S.128.

<sup>55</sup> Jürgen Petschull: Der Märtyrer. Hamburg 1986.

も翻訳されている。<sup>56</sup> ペチュルの説によると彼はジャーナリスト時代にゴードフロイ家の人々と知り合う機会があり、その家族の歴史に興味を引かれたことが『楽園最後の舞踏』を書く契機となった。<sup>57</sup>

19世紀後半ハンブルクから南洋に進出したヨハン・ツェーザー・ゴードフロイ父子商会は、主にサモアで大規模プランテーションを所有し、社主であったヨハン・ツェーザー・ゴードフロイ六世は「南洋王 (der König der Südsee)」と呼ばれる存在となる。商会はコプラをドイツに輸入して武器や繊維製品を南洋にもたらし貿易や海運業を営んでいたが、学問の後援者と自認していたゴードフロイは、ハンブルクにゴードフロイ博物館を開設し、民族学的蒐集や展示、生物学関係の雑誌<sup>58</sup>の出版も行っていった。歴史学者のR・ヴェントは、「南洋」に関してドイツ人が抱く4種のイメージ空間の一つとして「民族学的蒐集物」を挙げているが、<sup>59</sup> そこにはゴードフロイ博物館やハンブルク南洋探検隊 (Hamburger Südsee-Expedition) らの功績があった。

小説『楽園最後の舞踏』の中心人物達は、商会の経営に苦心するゴードフロイ六世やニューギニア地域に派遣された商会の社員、そして探検を行うゴードフロイ博物館の生物学者達である。その他ロベルト・コッホの弟子である若き医師や、プランテーションの女性経営者、キリスト教の伝道師達と、南洋小説の背景としては恰好の人物達が配置されている。しかし物語はある程度事実に基づきながらも大筋はフィクションで、主人公である生物学者のクラインを始め、多くの登場人物が虚構の存在である。彼らは商会のダイヤモンド発掘計画に関して詐欺師達と対峙し、「バイニングの虐殺」に遭遇し、また原住民の聖地に侵入したことに因ってカニヴァリズムの報復を受けるな

<sup>56</sup> ユルゲン・ペチュル『コマンド・フセインの復讐』（邦題）平井吉夫訳（新潮文庫）1989.

<sup>57</sup> Martina Goy: Spezialist für dramatische Geschichten. In: Die Welt. 06.09.2009.

<sup>58</sup> „Journal des Museums Godeffroy“ (1873-1910).

<sup>59</sup> Reinhard Wendt: Die Südsee. In: Jürgen Zimmerer (Hg.): Kein Platz an der Sonne – Erinnerungsorte der deutschen Kolonialgeschichte. Frankfurt a.M. 2013, S.41f. (他の三種は、“南海の楽園”, “熱帯雨林”, “地球環境破壊の地”である。)

ど、非常に危険な体験を行うため、この作品は「歴史スリラー」と呼ばれている。そして歴史的事実との整合性を犠牲にしつつロマンスを含んだ緊迫感のあるストーリー展開になっているため、全体的にはコロニアル時代の冒険物語を読んでいるような印象を受ける。とは言えこの作品の特筆すべき点は、これまで一度も小説に登場したことがない舞台<sup>60</sup>を取り上げ、それまで「未開人 (die Wilden)」としか呼ばれてこなかった人々、特に「バイニングの虐殺」の首謀者であるト・マリアに語らせている点である。また物語が商社、学問、教会という植民地の支配構造を成す3つの領域の結節点で展開していることも、作品の大きな特徴の一つである。

メラネシアにおけるカトリック教会の姿勢は、ラス・カサスと「バリャドリッド論争」の時代からさほど変化していなかったと推測される。1888年にニューブリテン島に赴任した司教代理のルイ・クッペは、植民地支配とキリスト教との協調関係を強調し、「この哀れな未開人達を馴致し、彼らに礼儀作法を教えるためには宗教が不可欠である」<sup>61</sup>と教団誌に書き送っている。そして島民については、「彼らは高程度の悟性を有してはいるが、それがなければ人は彼らを人間よりむしろ動物だと見なすだろう」<sup>62</sup>と述べている。しかし住民の間にもさらに氏族間の階層があり、山岳地帯の後背地に住むバイニング族は沿岸部に住むトーライ族に蔑視され、一部は彼らの奴隸的存在となっていた。<sup>63</sup> 聖心会はそのような隷属的なバイニング族を引き取って集落を作り、集団生活を営んでいた。ト・マリアは孤児だったためにまずトーライ族の、次にドイツ人商人の奴隸となり、その後教団に引き取られてラッシャー神父の家僕となった。<sup>64</sup> トーライ族に対して劣等感を持つバイニング

---

<sup>60</sup> Carsten Jaehner: Spannung in den Deutschen Kolonien. In: Histo-Couch. August 2015. <<http://www.histo-couch.de/juergen-petschull-der-letzte-tanz-im-paradies.html>>[Abruf:14.08.2015]

<sup>61</sup> Krug: »Der Hauptzweck ist die Tötung von Kanaken«. S.274.

<sup>62</sup> Ibid.

<sup>63</sup> Ibid., S.282.

<sup>64</sup> Ibid., S.275.

の中でも、孤児で奴隷だったト・マリアはサバルタン中のサバルタンとも言うべき人物である。虐殺の最初の犠牲者となったラッシャー神父は、植民省の官報にバイニング族に対する軽侮を隠することなく次のように公表していた：彼らは外見も醜く、「性格は内気だが愚鈍」、しかも「粗暴で程度が低く、ある意味において獣化している。」<sup>65</sup> 神父は誠実な人柄だったが規律を犯す者を鞭打ちで罰する厳格な教師であり、反抗的なト・マリアに対して軽蔑によって応えていたと言われている。<sup>66</sup>

『楽園最後の舞踏』の中ではラッシャー神父がほぼそのような人柄として描かれており、サバルタンのト・マリアは利発な青年として登場する。彼は神父による鞭打ちの刑から自分を庇ってくれたドイツ人医師を相手に、反抗のための弁明を行っている。例えばバイニング達はドイツ人を招待した覚えはなく、彼らがドイツ人のために労働したりその習慣に従わされたりする謂われはないこと、また彼らの神とその掟は自分達のものではなく、自分達には独自の伝統に則って生きる権利がある (272f.)、等の内容である。この医師は架空の存在であり、ト・マリアの“声”はあくまでもペチュルル創作であるが、ト・マリアが神父達に対抗するにあたり他のバイニング人達を味方につけていたという説から、<sup>67</sup> 本来彼は人望もあり、恐らく仲間達とも上記のようなドイツ人を駆逐するための合議を行っていたであろうことは想像に難くない。よってこの〈他者〉の声の代弁は、『反乱のポナペ』におけるそれと同様に、「領有」や「封じ込め」と言うよりは公正な「代補」を目的として行われたものだという印象を受ける。また神父との衝突の原因となったポリガミーの習慣や、ドイツ人の関心の的である食人の習慣についても、それが彼らの伝統であり、「他の世界の人間には関わりのないこと」(274) だという弁明がなされる。このような文化相対主義的思考は植民地時代にはほぼ存在しないものであり、ポストコロニアルな〈他者〉性を構築する新たな

---

<sup>65</sup> Ibid.

<sup>66</sup> Ibid., S.281.

<sup>67</sup> Ibid., S.284.

試みであると捉えることができるであろう。主人公が結果的にカニヴァリズムの犠牲になってしまうことも、野蛮な風習による不当な犠牲と言うよりも原住民の聖地を侵すという行為の結果として描かれており、そこには西洋中心主義に対する批判的視点が含まれている。

『楽園最後の舞踏』の中心人物達は本来善意のドイツ人達で、その善意と冒険及びロマンスの筋書きが植民地支配の現実を無害化しているという批判も可能であろう。しかし冒険小説の仕立てでありながらも「実は歴史の書である」<sup>68</sup>という書評の評価にも顕れているように、作品は明らかにコロニアル小説とは異質の文学的資質を有している。その資質はやはり、ドイツ領南洋の中でも特に発展段階の末尾に属する者として従来全く声を与えられてこなかったサバルタンの声を可視化するという試みに備わるポストコロニアル性であると言うことができよう。

## 8. 結語

本論で取り上げた三作品は、ニューギニア地方に関して啓蒙時代に作られたステレオタイプに対抗する19世紀末からの「修正ディスコース」の系譜上に位置づけることができる。しかし上述のように、〈他者性〉の構築や対位的読解等によるポストコロニアル文学の産出は、ドイツにおけるオセアニズムの新たな展開と捉えることができるのではなからうか。

とは言えオセアニズムはオリエンタリズム同様、ドイツやヨーロッパの批評空間において生起するもので、当該地域の現実を反映したものではない。従ってドイツ文学研究によるオセアニズム研究が批評の閉域性を改変出来るという保証はどこにもない。バーバも言うように、〈他者〉は「解釈され、収納される対象にすぎ」<sup>69</sup>「ある〈他者の〉文化内容についてたとえどれ

<sup>68</sup> Jens Dirksen: Deutsche Südsee-Sünden in einem historischen Thriller. In: Westdeutsche Allgemeine Zeitung. 29.07.2010

<sup>69</sup> バーバ『文化の場所』, 55頁.

だけ精密な知識があったところで、たとえそれがどれだけ民族中心主義を避けつつ表象されていたとしても、<sup>70</sup> 解釈が理論の閉域の中で起こる限り「支配の関係は再生産されるだろう。」<sup>71</sup> 従って〈他者〉を巡るテキストは常にアンビヴァレントである。しかし、批評が閉じられた円環になってしまわぬために、従来とは異なる複数の歴史と場所の枠において考察し、微妙な差異、変化と洗練を生み出して行くことが求められている。そのことが、批評が持つ保守的な権力とは区別可能な、批評自体に内包される変革への道を開く可能性に繋がるものと思われる。〈他者〉を巡るテキストにおけるポストコロニアル文学の資質はそのような差異と変化を生み出すことに資するはずである。本論で取り上げた小説はこれまで論じられることの少なかった作品ではあるが、ポストコロニアル批評の場では理論の陰に埋もれがちな作品自体を捉え、そこに潜む微妙な変革への差異を少しずつ開示して行くことが、上述の閉じられた空間を開く道であろうと思われる。

【本稿は2015年度の北海道ドイツ文学会第79回研究発表会における発表に一部基づいており、JSPS科研費15K02400の助成を受けたものである。】

---

<sup>70</sup> 同上、56頁。

<sup>71</sup> Ibid.

## „Ozeanismus“ und die deutsche postkoloniale Südsee-Literatur

Miyuki SOEJIMA

Die deutsche Kolonialgeschichte wurde noch im Jahr 2003 als „weißer Fleck auf einer deutschen Karte der Erinnerungen“ bezeichnet. Aber sie ist inzwischen Gegenstand eines kulturellen Gedächtnisdiskurses geworden und auch wissenschaftlich wird viel dazu recherchiert. Neben den deutschen Kolonien in Afrika ist die deutsche Südsee Objekt der Diskursanalyse geworden, so spricht Gabriele Dürbeck von „Ozeanismus“ in Anknüpfung an „Orientalismus“ und „Afrikanismus“ nach Edward Said. Auch literarische Werke um den Topos deutscher Südsee sind entstanden, Christian Krachts *Imperium* (2012) ist ein gutes Beispiel dafür. In diesem Beitrag werden drei postkoloniale Südsee-Romane vorgestellt, und bei jedem Werk wird untersucht, was für literarische Verfahren die postkoloniale Qualität des Werkes ausmachen.

1) Gerhard Grümmers *Ponape im Aufstand* entstand schon im Jahr 1991. Der Aufstand auf Ponape war der größte Widerstand gegen die deutsche Kolonialherrschaft in der gesamten Südsee. Das Werk ist ein dokumentarischer Roman und schildert den Ablauf des Widerstandes. Dabei versucht der Autor, koloniale Alterität zu konstruieren, indem er die Aufständischen genauso viel sprechen lässt wie die deutschen Beteiligten an der Strafexpedition. Die konkreten und detaillierten Beschreibungen stützen sich auf eingehende Recherchen, so bekommt die Leserschaft das Gefühl, die gerechten und überzeugenden Stimmen der Fremden gehört zu haben.

2) *Die Missionarin* (1997) von Sibylle Knauss behandelt auch den Aufstand auf Ponape und hat eine ganz andere literarische Strategie als bei Grümmer. Der Roman weist eine polyphonische Erzählweise, mehrere Schauplätze und mehrfache Textebenen auf. Das ermöglicht der Leserschaft, die koloniale Imaginäre zu relativieren und die Geschichte kontrapunktisch zu lesen. Die Protagonistin ist eine junge Missionarin, die von Deutschland nach Ponape versetzt wurde, und ihre Geschichte wird von ihrer Stieftochter bzw. ihrer Großnichte erzählt. Alles in allem ist das Werk eine raffiniert und plausibel geschriebene postkoloniale Familiengeschichte.

3) Neben dem Aufstand auf Ponape gehört „das Baininger Massaker“ zu den dunkelsten Seiten der Geschichte deutscher Südsee. Jürgen Petschulls *Der letzte Tanz im Paradies* (2009) stellt einen Vorfall dar, bei dem zehn deutsche Missionare ermordet wurden. Der Autor macht die kolonisierte subalterne Stimme des Mörders hörbar, die früher gar nicht gehört wurde, so wird beschrieben, wie die Deutschen als Herrenmenschen den „Wilden“ ungerecht gegenüberstanden. Die Protagonisten sind Kaufleute und Naturforscher der Handelsfirma Godeffroy. Sichtbar wird also die Verflechtung von drei Bereichen des Kolonialismus – nämlich Handel, Wissenschaft und Kirche. Dieses Werk wird zwar als ein historischer Thriller gelesen, aber so wie die oben genannten beiden Romane gehört es auch zur literarischen Tradition, die seit Uwe Timms kanonwürdigem *Morenga* (1978) eine kritische Revision eurozentrischer kolonialgeschichtlicher Narrative durchführt.